表４　三つのアプローチから見た、〈自己完結社会〉の成立、および〈生の自己完結化〉と〈生の脱身体化〉の位置づけ

	A.「環境哲学」 （【第二部】で言及）	**B.「〈生〉の分析」** （【第三部】で言及）	**C.「〈関係性〉の分析」** （【第四部】で言及）
イ．〈自己完結社会〉の成立	人類史における「第三の特異点」 「〈社会〉と〈人間〉の切断」	「〈生活世界〉の空洞化」と「〈生〉の不可視化」の進行、および「〈社会的装置〉の〈生活世界〉からの自立化」と「〈ユーザー〉としての生」の完成	〈共同〉のための人間的基盤の喪失、および〈他者存在〉から切断された虚構の「この私」の肥大化、全面化
ロ．〈生の自己完結化〉〈関係性の病理〉		意味体系が脆弱化した〈社会的装置〉の台頭に伴う、一般的対人関係における〈根源的葛藤〉の顕在化	「０か１かの〈関係性〉」がもたらす「底なしの配慮」と「存在を賭けた潰し合い」、「不介入の倫理」の全面化と、それに対する挫折
ハ．〈生の脱身体化〉〈生の混乱〉		〈社会的装置〉への“委託”に伴う、時空間的な〈存在の連なり〉に根ざすことのない〈生〉の成立、加えてその帰結としての〈存在の強度〉の脆弱化	虚構の「この私」と「意のままになる他者」の希求に伴う、「意味のある〈関係性〉」と「意味のある私」の喪失

上柿崇英（2021）『〈自己完結社会〉の成立――環境哲学と現代人間学のための思想的試み』農林統計出版、上巻、p.288